

<東京湾の貧酸素水とは？>

夏から秋の初めにかけて、東京湾の底層には溶存酸素量（DO：海水に溶けている酸素の量）が低い水が広がっています。平成25年9月に測定した底層の溶存酸素量の様子を下の図に示しました。

表層で増殖した植物プランクトンは沈降して底層に運ばれ、分解されるに伴って底層の酸素が消費されます。夏季には上層と下層で水温差が大きいため上下の海水が混ざりにくく底層に酸素が供給されずに低酸素状態となります。植物プランクトンの沈降量が多い海では消費される酸素が多いため貧酸素状態、さらに無酸素状態となることがあります。

海の中の生きものが呼吸するためには、最低でも3mg/Lの酸素が必要とされています。東京湾には溶存酸素量1mg/L以下の貧酸素水塊がみられます。このような溶存酸素量では、魚はもちろん底泥にすむ生きものにとっても生き残るのが難しい状態です。

ただ、このような貧酸素水塊は周りより水深が深い航路や水深が20m近く深い場所でみられ、護岸に近く、水深が7~8mと比較的浅い場所では表層水と同じ程度（6mg/L）の溶存酸素量があります。

